

ビバレッジ文書集成 State Provision for Social Need 〔マイクロフィルム版〕

中 村 幸 弘

はじめに

この資料集成は、イギリス政府が世界に先駆けて行った、画期的な言わば「福祉国家の建設」の真意と背景、社会的影響を当時の一次資料で忠実に再現するもので、その名のとおり、国家が第2次大戦という激動の時代に社会の窮状を救うためにどのような対策を用意したのか、を詳らかにする資料である。

総合図書館では、全3集で構成されている資料集成の全てを所蔵している。第1集は、イギリスのみならず多くの資本主義諸国の社会保障制度の理論的基礎を築いたと言われるビバレッジ報告に関連する

公文書で、第2集は、経済学者で社会保険制度の権威であり、この報告を提出した委員会の委員長であるビバレッジの個人文書で構成されている。そして、今回購入した第3集は、同報告と同時代に行われた社会調査の中から、社会保障と関わりの深い原資料を復刻している。全3集のコレクションは相互に関連しているが、各集の内容についてもう少し詳しく説明することにしたい。

第1集

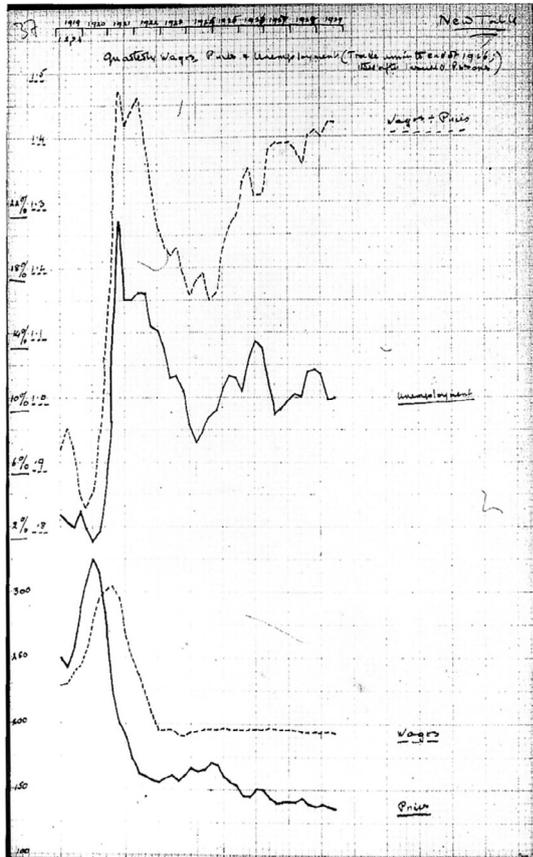
第1集では、ビバレッジ報告が形作られる過程から実行に移されるまでの、あらゆる段階の検討資料が網羅されている。

ビバレッジ報告とは、1942年に戦後イギリスの福祉国家形成の基本骨格を提示した王立委員会の報告書のことで、正式名称は『社会保険および関連諸サービス』であるが、後述するW.ビバレッジが委員長であったことから、こう呼ばれることが多い。(岩波小辞典 社会学219頁)

第1集の具体的な内容は、英国国立公文書館に保管されている、『社会保険および関連諸サービスに関する関係各省委員会』(通称ビバレッジ委員会)のすべての議事録と資料(CAB87/76-82, 1941年~42年)、さらに、報告内容を実行に移すための、『再建に関する内閣委員会』の資料(PIN8, 1943年~1944年)という2種類の公文書である。

前者には、1941年の7月に開かれた第1回から1942年の10月に終了するまで全44回のビバレッジ委員会そのものの議事録が完全に網羅されているほか、委員長のビバレッジが書き残したメモや草稿、委員会で配布された各省庁からのレポートなど172種におよぶ未公刊文書が収録されている。この資料群からは、報告書がどのような議論の下で形作られたのか、その全貌をうかがい知ることができる。

また、各国の社会保障制度に関するレポートが存



1919年～1929年の賃金、物価及び失業率に関するグラフ(第2集より)

在することから、委員会の初期の段階では、各国の制度の成り立ちを詳しく調査したことがわかる。

後者は、報告書が提出された後の英国政府内の議論を余すところなく伝えている。最初の部分(PIN8/1-84)では、大蔵省主計長官の管轄下の『再建に関する内閣委員会』事務局が保存していた内部文書が含まれている。事務局には、保健省、労働省及び内務省の官僚が派遣されていたため、この文書から、行政機構がビバレッジ報告を実行に移すためにどのように検討、計画したのかが読み取れる。事務局が毎週行った会議の議事録や関連資料、各省庁内での議論の報告や関連団体からの文書など膨大な資料を目にすることが出来る。

後半(PIN8/85-167)は、ビバレッジ報告に関する保健省の文書で構成されている。特に、社会保険と関連サービスを管轄し、ビバレッジ報告に関する省庁間での代表者である、フィリップス(委員長 Sir Thomas Phillips)委員会に関する資料が数多く含まれている。とりわけ、報告が提出された直後の1942年12月から1943年1月までの間の、同委員会の文書(PIN8/115-116)には、議事録、覚書、注釈を付されたビバレッジ報告がそのまま残されており、重要性が極めて高いと言える。

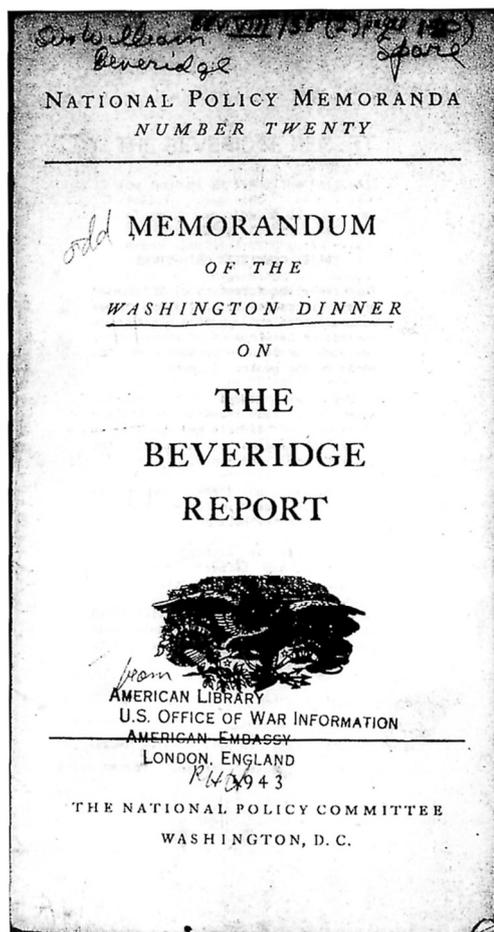
第2集

第2集は、London School of Economics(LSE)の図書館に保管されているビバレッジの個人文書をマイクロ化したものである。

ビバレッジは、1879年にインドに生まれ、オックスフォード大学に学び、失業保険問題の権威と目された。職業紹介所の創設に参画し、失業保険立法委員会委員長や労働次官を歴任、労働党所属下院議員となるなど数多くの公務に就いた。と同時にLSE校長、オックスフォード大学ユニバーシティ・カレッジ学寮長を歴任するなど、経済学者として一流の経歴を併せ持っていた。

現在LSE図書館では、彼がオックスフォード大学へ遺した物も含めて、すべての個人と家族の文書が14セクションに分けられ系統的に所蔵されている。本資料には、その中から、公開されている学術研究や公務に関する文書、特に社会保障制度と関連の深い5つのセクションが4つのパートに分けて収録されている。

パート1では、セクション・ に分類されている、主に20世紀初頭から1920年代までの期間に彼が



米国政府によるビバレッジ報告に関するパンフレットの表紙

携わっていた仕事や著作に関わるもので、特に、失業問題、失業保険、職業紹介所に関連した資料で構成されている。失業問題に関する権威となっていくキャリアを裏付ける資料が網羅され、1909年の著作“Unemployment: a problem of industry”に関するメモや草稿も見られる。

パート2は、セクション に相当し、彼の政治活動に関わる文書が中心をなしている。1945年の総選挙関連の資料や労働党関係の書類、また、彼が議会で行った演説や答弁、特に社会保険、児童福祉法、経済状態、住宅問題、家族問題に関わるものが数多く含まれている。

パート3では、セクション に納められた、公共医療サービス、年金、高齢者問題、住宅都市問題を中心とした文書がマイクロ化されているが、戦後ヨーロッパや国連を主題とした文書も含まれている。

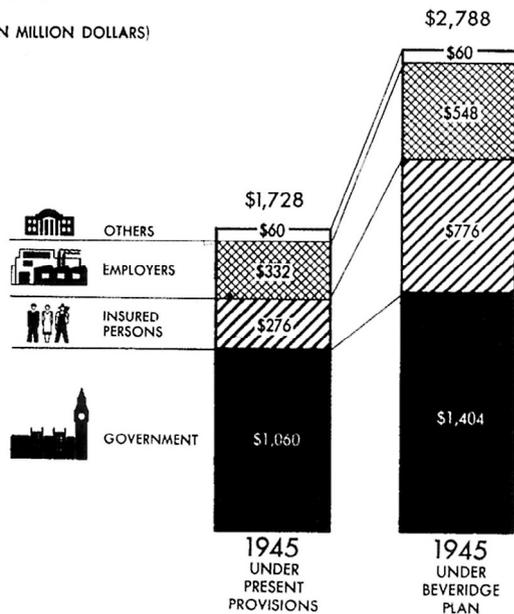
パート4は、彼が参画した委員会の報告書作成のための資料を網羅しており、ビバレッジ報告に関わる彼が保管していた資料もすべて含まれている。こ

26

THE BEVERIDGE PLAN

HOW MUCH WILL THE BEVERIDGE PLAN INCREASE THE COST OF SOCIAL SECURITY IN BRITAIN?

(IN MILLION DOLLARS)



PICTOGRAPH CORPORATION, FOR PUBLIC AFFAIRS COMMITTEE, INC.

Maxwell S. Stewart, *The Beveridge Plan* より(マイクロフィルム所収)

の他、1930年に提出した石炭産業に関する委員会報告から1951年の放送委員会報告まで8つの委員会の報告書作成に関わる内部文書を網羅している。

このように、第2集では、英国の社会問題に生涯を捧げたとも言える彼の公的生活の全貌が明らかにされることで、その思想的背景が浮き彫りにされている。

第3集

第3集は、ビバレッジ報告と同時代に行われた社会調査の集計前の原資料をそのままマイクロ化したもので、当時のイギリスの人々がビバレッジ報告に対してどう感じていたのか、社会保障に何を期待していたのか、集計、編集された世論調査ではうかがい知れない一般市民の生の声を伝えるものである。

ロンドンの南部にあるサセックス大学に所蔵されているMass-Observation Archiveには、80もの主題別に分けられた、1937年から1940年代を中心に行われた生の調査結果が納められている。主題の中には、成人及び高等教育、空襲、反ユダヤ主義、ビバレッジ調査報告、死刑、飲酒、幸福、住宅、娯楽、容姿、

復興、性行動、不法居住、投票、仕事などが含まれているが、この中から、当時の社会生活、特に社会保障に関連の深い下記12の主題を完全にマイクロフィルムで再現している。

1. 復興
2. 家族計画
3. 健康
4. 託児所
5. 成人及び高等教育
6. 戦後の希望
7. 戦時の公共政策・社会事業
8. ビバレッジ報告
9. 住宅問題
10. 仕事
11. 食糧問題
12. 燃料

例えば、ビバレッジ報告という主題の中には、興味深いまさに庶民の生の声が収録されている。50代の教養ある男性が、同報告を絶賛した声として「特に退職後の年金と失業給付の拡大が効果的だ、保険会社以外はみんなが賛成するので、すぐに法案を通してくれ」というものや、教育の主題では、娘を持つ父親が、才能ある子どもを美術学校に進学させてやれないことを嘆き、能力さえあれば誰にでも教育を受ける機会を平等に与えて欲しいと訴える、といった内容である。

Mass-Observation について

ここで資料の基となった、Mass-Observationについてもう少し詳しく見てみることにしたい。

Mass-Observationは以下の3人の研究者が同時に行った社会調査である。詩人でジャーナリストのCharles Madgeと映画監督のHumphrey Jenningsは、ロンドンで全国的なボランティアの組織を作り、あらゆるテーマのアンケートに定期的に回答してもらうことを二人で計画していた。他方、ニューヘブリッジを拠点とした人類学者であったTom Harrisonも、現代の英国人に対する人類学的調査をしてみたいという考えをもっていた。この二つのプロジェクトが一つになって、言わば「自分達の文化人類学的研究」を目的としたMass-Observationが形作られた。

ハリソンのチームは、あらゆる社会階層の人の、街頭や仕事場、集会や宗教的行事、スポーツ、レジャーなどでの日常生活を克明に記述した。最初の調査は、1937年から1940年にかけてポルトンとブラッ

クプールで行われた、後にThe Worktown Studyとして知られるようになったものである。時を同じくして、マッジとジェニングスは、一般人からボランティアを募って全国的な組織を形成した。メンバーは日記をつけ、さまざまなテーマに対して報告書を書くように依頼されると同時に、アンケートに答えることでMass-Observationに参加したわけである。

戦争の勃発により、すべての活動はロンドンに集約された。ジェニングスとマッジは役目を離れ、ハリソンがひとりで指揮を執るようになったが、調査に必要な経費は、情報省や消費動向に関心のある民間企業からの業務委託、あるいは出版活動でまかなわれた。ハリソンは1942年から戦役に就き、その間ボブ・ウィルコックという別のメンバーが指揮を引き継ぎながら、戦後も同調査は政府の社会調査の側面と市場調査、分析の両面を担うようになっていた。しかしながら、1949年にハリソンが、組織の権利を独立した市場調査会社であるところのMass-Observation社に譲り、学術的な社会調査の側面は失われた。

この1937年から1949年までの資料が、まず1970年にサセックス大学に寄託され、その後1975年には同大学に寄贈されることとなった。また、資料の中には、ハリソンが1959年に英国に戻って以降の、ボルトンとブラックプールでの2回目の調査資料なども含まれているため、一部1950年代や1960年代の調査資料も含まれていることになる。現在、このMass-Observationという活動は、同社の事業とは別にサセックス大学の事業として、責任者であるドロシー・シェリダンの下で1981年に再開され、今世紀に入ってもなお続けられている。

オリジナルの資料の構成は、下記7つのグループに分かれており、このマイクロフィルムは2番目の主題別コレクションの一部(12の主題)を完全に複製したものである。

The Worktown Collection , 1937-1940

The Topic Collections , 1937-1960

The File Reports , 1937-1972

The Day Surveys , 1937-1938

The Diaries , 1939-1965

The Directive Replies , 1939-1955

The Publications of Mass-Observation , 1937-

主題別コレクションの中に収められている資料は、インタビューの記録だけではなく、どんな人が、どこで、どんな状況で、インタビューを受けたのか、また、数多くの関連資料、インタビューアーへの指示や質問票への回答結果、通信文、メモ、写真、地図、小冊子、切抜き、広告、切符の半券などありとあらゆる当時の資料が残されている。これらは当時の社会状況をつぶさに伝えるだけでなく、現代の社会調査手法、特に質的調査の方法そのものへの研究を可能とする原資料とも成り得る。

おわりに

この全3集の資料集成では、世界各国の福祉国家建設に大きな影響を与えたといわれる英国の福祉制度、その枠組み作りから具体的な政策立案過程、思想的なバックボーン、当時の社会的背景と国内での反響などその全貌が明らかにされている。とりわけ、このたび購入した第3集Mass-Observation Archiveは、一般市民の生の声をそのまま伝える資料として価値が高いといえる。このコレクションを英国の戦時戦後の社会政策や公共政策、戦後復興、社会問題の研究はもちろん、あらゆる社会保障の研究に役立てていただきたい。

[参考文献]

デイヴィッド・クリスタル編、金子雄司〔ほか〕日本語版編『岩波 = ケンブリッジ世界人名辞典』岩波書店 1997

宮島喬編『岩波小辞典 社会学』岩波書店 2003

(なかむら ゆきひろ 学術資料課)